

三里塚岩の子供たち

第二集



三里塚・芝山婦人行動隊 編
加瀬勉 編
連合報道社 発行

序・ダビデとゴリヤデの対決

——少年行動隊の誕生は学校教育に対する現代の反逆である——

戸村 一作

私は三月十九日強制入封の日と他に二回にわたって、旧約聖書の「ダビデ物語」を少年行動隊に話したことがある。少年少女達
はよく聞いてくれたが、はたして私のいわんとした真意が伝わったかどうか。
私の語りたかった本意は、ダビデと巨人ゴリヤデの対決の中にみる少年ダビデの巨人に対する沈着な勇猛心その戦闘力である。こ
の対決を解するに、甲なる少年の血をわせる一片の武具としてのヒヨウムに終始するならば、今日文部省の国防教育にも通ずる
ものとしての危険性が十分にある。むしろ階級闘争上百害あって一利のないものとして排除すべきであると思つた。

さて、ここで考えべきことは、巨人ゴリヤデ將軍と牧童ダビデの出会いを通してみる階級的な闘いの本質的意義についてである。
まず牧童ダビデは、巨人軍ペリシテ軍の將軍ゴリヤデに対して、どうして微動もせず恐れを感じなかったかということである。巨人
ゴリヤデの天を衝く魁梧にユダヤの軍勢はくも手を散らすが如く逃走してしまつた。一人とり残されたダビデは、いかにして巨人ゴ
リヤデに対決したであろうか。体力的にゴリヤデの比ではないダビデが、何の勝ち目を闘いの資質としてゴリヤデに立ち向つて、いつた
であろうか。ゴリヤデの持つ巨大な槍と剣、甲冑の総武装に対して、裸の「石投げもつ」一つの武装である。この無謀の余りさ
に、敗走したユダヤの軍勢が、ダビデの法闘の成行きを直視できなかったのも當該として當然であつた。しかし、一般議論を繰れた
次元に立つたダビデは、ゴリヤデに対決する力値とその資質を、彼の生の実現として持っていたのである。

ここに、ゴリヤデ対ダビデの対決を階級的な生の実現性に絞って注目しなければ、「ダビデ」物語の真意は歪められてしまふ。私の
ダビデにみづめる唯一の注目点はここである。

しかし、牧童ダビデには、一見誰も見そこなう唯一のものがあった。それはダビデを台目までなくみ育ててくれたユダヤの山野
とその生活である。牧童ダビデの使命は羊の群を緑の野辺に導き、絶えず猛獣の襲撃に耐え、これを打倒することである。この生活を
通してダビデが養われた唯一の学問は、知識ならざる生活の知恵としての生きた学問であつたのである。従つて、そこ構築されたも
のは、ユダヤの軍人の持つていない不組にして不動な生命力とその肉体であつた。すなわち、これがゴリヤデ將軍であつたと見做す
ることのあり得ないダビデの不動の生活力となつて、もみせたのである。
牧童ダビデをして、巨人ゴリヤデに対する恐怖を除かした不可解な唯一の力は、生の実現性にあつたとみるべきである。

巨人ゴリヤデの勝ち誇つた暴力主義が、無名の牧童ダビデの羊を守る生活に敗北したのである。ダビデが常にユダヤの山野に
羊と生活をつなぐ中で、絶えず警戒をゆるめなかったものは、忽然と羊に襲いかかると見做された。立券をかき鳴らしてつ
つ散らばるダビデの機には、常に彼の「石投げもつ」が用意されていた。うたねの中においてさえ、羊を飼う者としての使命と
その警戒心は忘れなかつた。

ある日突然、猛獣ならぬペリシテ軍という巨人軍の出現となつたのである。ユダヤの職業軍人は闘はずしてゴリヤデの面前から敗走
していった。闘う者不在の中に、ただ一人ダビデがゴリヤデと対決したのである。

この牧童ダビデのゴリヤデ將軍に勝るとも劣らない巨大な戦闘力は、どこからどうして出現したかという疑問である。
要は、牧童ダビデが常に羊と生活をつなぐ日常の生活からくるところ——すなわち生活そのものが、ゴリヤデを一撃の下に打
倒したと見るべきである。権力に従順しない独自の生活の自由のたまたます絶望的な強制力が、彼の対決を法看せしめたのである。生活
のないいかなる闘いもあり得ないことは、ここに明確化される。ダビデが立券をかき鳴らして「石投げもつ」を打ちかきむ
とは、羊を飼う者の不可分の生活であつた。巨人ゴリヤデの圧倒性に対して、ダビデの日常性をもつたのである。ダビデにとつ
ては、ごく自然な巧みな虚心に羊の生命を守る日常の生活の闘いあるのみである。だからゴリヤデを倒すゴリヤデの眼と腕には、百発
百中の的確な確率性と、その自信をもつて対決できたのである。素直自然たる不屈の精神が、闘いの生活化の中に繰りあげられてい
たのである。これはゴリヤデの命闘に反対しての、ダビデの命闘の思ひの思ひの思想ではなく、彼の羊と生活をつなぐ闘いの生
活化の絶対性、闘いの原点があつたのである。

今、三里塚にはゴリヤデならぬ日本の支配階級が虎視眈々と、羊ならぬ農民を餌食とし、その土地を殺奪せんとしている。ここ
に文部省を口にするのは愚かしいのだが、今日の義務教育にすでに私たちの求めたものもないところから、純な少年少女の心を毒す
る恐ろべき国家権力の支配を認めるのである。教科書の改題に伴う神話の復活と国防教育の再現の中にもつもの何かが。やがて青少年
の生命を軍靴の下に狩りたてる侵略戦争の再来である。義務教育が、どれだけ少年少女の心に、歴史の証人たるべき生の実現性を教
えているだろうか。

実に三里塚における少年行動隊の誕生には必然性があり、これこそ現代の学校教育に対する真向からの反逆である。私は十九日の強
制入封においても、機動隊、ガスターマン、空港公園園警員が、少年行動隊に追い散らされていく不思議な現実を目撃した。世の教
育者という人々は「子供は何もわからないから……」といふが、子供は三里塚闘争を理解している存在は他にないのだ。

三里塚・芝山から一人でも多くの牧童ダビデ少年の出現を心から待望する。(三里塚・芝山連合青少年対抗委員会)

第一部

この巻は七〇年五月十四日
盟休戦して坐り込み闘争に参
加した子供たちの作文集です



千葉山武郡芝山町妻田九六四

音 沢 浩 (九才)

朝五時半ごろとつこう(取香)につくと、しゅくのけいじたちが五、六人きていました。はくたちをしろじろ見でいました。「はくたちならにもしないの、どうしてしゅくたちは来ているの、だろ」と、はくは思いました。

なかやつ(中谷津)のかあちゃんたちは、しゅくのことを「大捕れ 大捕れ」とはかにしました。ほんとうにはかなやつだ!

おとさんとあかさんといっしょに、はくたちのまもる山へいきました。山の中に入ると少年行動隊の友だちがたくさんいました。十時に公団や機動隊が来るのでそれまで学せいと遊んだりデモをやったりしていました。とうとういよいよものこんだ楽しいものか、と思いましたが、

十時少し前になると、公団や機動隊がはくたちのいる山の方へかかってきました。

おあきさんが

「つままえよとしたらういっついてやれ」といって、はくは

「はやくはしらないかあ」と思いました。

「このやろう、せつたいりくよりはさせなぞ」

と思いましたが、

公団がせめてきました。とうちゃんやあかちゃんは山から出て公団とたたかいました。はくたちもいっしょになって山からとびだしました。

「公団捕れ。機動隊捕れ」とさげました。

はくたちのいきおいにまけて、公団はしりぞきました。

「はくたちでもよいんだなあ」と思いました。

「これらもいっつも先に立って、公団をおいかえてやろう」と思いました。

「土地しゅうよう法三十七号により」といってまたきました。

そのときはくははらがたつて、公団の金玉をつかんでやりました。公団はおこって

「なにをするんだ。このやろう」といってこりまわりました。

さいごに公団たちはおとなの人たちに取られて、くいを一本うらましました。けれどもはくたちがぬいてしまいました。くいをすてたときに、学せいがわーっとなを上げました。けれどもおわつてい

たときに、大木さんのうちにおうえんいきました。けれどもおわつてい

ました。はくたちやおとなの人たちでうらばに公団をおいかすこと

ができました。はくは、とでもうれしくうらに帰りました。

芝山町妻田四八ノ三

松本 達也 (九才)

五月十四日 家族ぐるみでさわらみに行った。朝はやくからおきてごはんをたべていたら、もうけんちゃんも少年行動隊のはたをもってきたので、中谷津(なかやつ)のあつまるところにはたをもつてけんちゃんといっしょにいきました。

中谷津の人がぜんいんあつまつて、それに学生もあつまつて、みんないっしょに車までかきました。へんかーのところに車を置いて、学生といっしょにデモをやりました。さわらみのおぼしよまでいって、へた(辺田)のひたがいて、べんとあんなかたべていた。

しばらくして、山のまわりをバリケードをはって、その中にはいってさわらみをして、きょうたいやしゅくやいろいろのものがきて、ヘリコプターなんかもとんでた。

それで、少年行動隊や学生の人たちみんな、「かえれ! かえれ!」といつたが、ぜんぜんきめがありませんでした。それでこんどはバリケードのままでいって、こうだん(公団)と新東京国際空港(公団)がとちへくるとおぼしておいはうにおいやつてしまつたり、こうだんのうつくいなんかをみんなといっしょにぬいたりした。それからまだ、きょうたいの車がおいてあるところまでデモをしつたりしました。

「いよいよ、まだ来ないのだから待つてそれに乗るから」と言いました。

僕たちの車は機動隊を回って行きました。大木よきさんの家の前でとまりました。ここだと思つてみるとちがうので、映画班の車に乗りました。すぐ近くの坂を上り、途中の引っこした家のあとからむしろをもつて行きました。左へ曲ると墓地へ出ました。右へ行くとなんか支隊の会の人がいきました。

朝飯を食べている人たちがいました。僕は麻子とねえちゃんとかをわけて食ました。いまいっちゃんにあげました。

「ML」や「連帯」などがやってきました。

そのうちに、「少年行動隊集まれ」と言つてきたので行きました。僕たちはバリケードの中央部にすわつておこなりました。

十時ごろ公団が来るので、豊秋ちゃんがすべりの空き地にいると機動隊が近づいてきたので、バリケードの中へもどりました。

十時ごろ、前の空き地で少年行動隊が集まりました。通称「じいさん」という人が演説をしました。

次に少年行動隊で出て、と言われたので、はくがシヨプレヒコールをして公団、私服のいる所へデモをして、帰ってバリケードへ入りました。機動隊や公団がたくさんいました。

「公団かえれ」と言つて、二月十九、二十日の時と同じく、「土地収用法」と書いてあるのを立てたので、少年行動隊が公団を追い返しました。

あとで思いました。どうしてこちのほうに空港ができるのか、それで農民をこらせるのか、農民は、いのちのつきにたいじなのは畑や田だ。それをとられたらなにもできなくなっちゃう。だからはくたちもすわりこみにいきました。

それに、空港ができるとべんきもできなくなり、いつ飛行機がおつたらかわらない日ばかりになりたくない。

だから反対しているのだ。

三里塚軍事空港反対!

芝山町妻田二〇一

石井 伊知郎 (十才)

五月十四日に僕たちが公団の強制撤去阻止に行くところは、駒井野の家の家だと聞いていました。

だがその日の朝、「取香(とつこう)の『坪共有地に行のだ』と父ちゃんが言いました。むすび(二つ)食べて家を出ました。だいたいの人が行つてしまいました。トラックでT字路の所まで行くとなりの孫兵衛の父ちゃんが残っていました。家の父ちゃんが

「乗せてつてやろうか」と言つた。

二回目も同じです。三回目はすわつただけじゃらせてくれません。一回アイスをおきました。

公団が食付たことを言いました。みんなはデモをして大木よきさんの家の前に集まりました。敏彦ちゃんも旗をもっていました。戸村委員長や山室浩(ちゃん)が話をしました。

芝山町妻田五八五

廣嶋 一雅 (十才)

ドラムかんとどしどし目があった。

「あ、そう。今日は立入り測量の日だ。だからあちゃんたちはは早くおきて、はくをおこしてくれたんだ。」

おきてすぐはくを出て、三ノ宮さんの家の下でみんながあつたのをまていた。みんながあつたので、測量するばしよに行つた。そこについたのは六時ごろであつた。それからすぐあ

きはんを食べた。するとそこへたしさんはいました。たしさんたちは、バリケードを材木で作っていた。

そうしているうちに十時ごろになると、きょうたいにまられたとうだんがきました。そのとうだんに測量させなために、はくたちが少年行動隊がさきだつて、「こうだんかえれ! きょうたいかえれ!」となんともくつかえしてさげました。

その少年行動隊の力によって、測量ができなかった。そして、測量阻止のたかいにさんかして女子学生が、目にくきさんな

芝山町番田七五八

戸村 子 (十四才)

飛行機が降りたら、山について落ちて、民家の上について落ちて、必ず火事になり、多くの人が死ぬことになり。

このような空港を建設するために、空港公団は農民をだまし農地を買収しています。そして、空港建設反対、農地は絶対に農地を奪って、空港を作ろうとしています。

政府は最初、新東京国際空港を福里村に作るつもりでしたが、地元農民の猛反対に、やむを得ず国有地、私有地のある三里塚の半分以上になり、買収がなかなか進まないと思いい、この三里塚・芝山の現地住民の意志をまったく聞かずに、強引に決めてしま

「いら反対でも空港はつく。そういう政府や空港公団に対しては、反対運動を家族ぐるみでやっていく他はありません。三里塚軍事空港絶対反対！ 強制買収反対！」

芝山町番田四六〇

並木 美智子 (十四才)

私たちの生活が変わってきたのは、空港問題がおこってからです。私たちが昔から生活してきた場所が失われることは、一番つらいことです。

父母が寝る時間も削いで耕した土地の上に飛行機が飛び、その上、騒音に悩まされる空港など、絶対に作ってほしくない。

一、土地物件課書作成の立会いに遅一人応じていない。

一、誘導灯用地なき不安な事業計画は不当だ。

収用法そのものが違法だ。収用委員は、直ちにやめるべしだ。空港絶対反対！

芝山町大里二二二

斉藤 晴子 (十五才)

空港ができると騒音で勉強がなくなるので絶対反対。

芝山町大里七八

斉藤 博子 (十五才)

肥沃な農地を犠牲に空港を作る事は反対である。

芝山町大里二〇七

斉藤 政幸 (十五才)

○公害のひとつ、空港反対。勉強ができなくなる防音校舎での勉強はイヤだ。

芝山町番田二二八

石田 幸子 (十五才)

○三里塚に設置しようとしている空港は、日米安保条約のもとにあっては、必然的に軍事空港化する。このようなもののために、農地をとり上げられるのはイヤです。

作る人なら国民の迷惑にならない場所に、正しい目的をもて作れ！

軍事空港絶対反対！

成田市十津三(三)番地二四二六

関根 久美 (十四才)

空港建設反対、軍事空港から反対！

成田市ノ根一五八

小川 恵子 (十四才)

五月十四日、第二回日入り調査の日です。私は翌休日の留守番をしながら、家で勉強してました。お父さんやお母さんは六時に弁当をもって家を出ました。普段は六時頃にはたわわの自分の土地を守るために必死にたたかっている父母の姿を見て、本当に大変だと思いました。

土地収用法違反とか、強制しつと、何故政府、公団は一生懸命に農民や勉強にはむ私たをいじめるのしょう。

騒音も公害も汚染もない広い青空の下で、すんだ空気を呼吸し、吸って、思う存分勉強できる日が、一日も早くくるように毎折っています。

芝山町若山三二九〇

池上 平一 (十五才)

一、分期申請 裁決は違法だ。

芝山町若山平野

小川 輝子 (十五才)

今まで長期にわたって反対闘争が行われてきた。現在においては、もう新空港も時間の問題となつてしまつた。しかし、そうだからといって、ここでせめては、今までの苦労も水のあわになつてしまつて、

私はまだ生徒なので、反対運動に対するいろいろな問題について、よく知らずとも思わないし、それを知つてもどうにもならないが、自然と、家で祖父や父の語っていることなどから、大ざっぱなことはいわかる。するとやはり同じ所に住んで、同じ問題にぶつかっているのに、まだ生徒だからそんなこと全く関係ないとい

いきれなくなつてしまつて、先生などから「あなたがたは生徒なので空港に対して関心をもちななくていい、生徒なのを勉強していればそれでいい」といわれてきた。そうするとやはり考えさせられてしまつて、ほんとうにそれではないのだろうか。

地域によって反対、賛成、条件賛成がでているが、やはり私たち生徒は、自分の家何かが、自分の意見になつてしまつたら、このあいたも闘争があつたが、それと子どもも出られれば出るようにとのことであつたが、私はこれに出ようとは思わなかつた。反対、賛成にせよそれなりの理由がある。

私は反対だ。それは、政府がここに空港を作るには、米軍基地にするといふことである。日本はこれら先陣に闘争しないといふきれない。第二次世界大戦によって、多数の命がむせんに死んでしまつたが、今後もまた、戦争をやることは絶対にゆる

せない。

また、政府はもうつきた。げんに私の部落から二、三軒家を出たが、はじめに政府と約束した内容とはちがうことだ。もし、約束があつていたら、他の土地も、と頭が上つているの。政府がここに空港を作ることに反対して、この住民にできる限りの事をしてくれれば、別な問題として住民も考えようと思つても政府はそんなこといさいいいしてくれないのである。それなのに政府のいうことを聞いて、この土地を出るわけにはいかない。

ここに空港を作ることには絶対反対だ。もしこの土地が、この新空港が他の土地にうつたとしても、それにも反対だ。

芝山町若山

榎原 あゆ子 (十五才)

私たちが農民が生まれ育つたこの平和な土地を、近辺の平和をなぜ残酷に引きつらなければならないのか。

農地を取り上げられる。毎日毎日大きな騒音が鳴りひびくのに悩まされる。いたる所に反対のボスターがはられ、血の雨を降らせても……土地を守るために、あくまで意気高く農民なのに、賛成して去っていく人、一部用器買収が進められているのに、関係のない人が心細い。とても心細い感じがします。

こんな事は笑い事でもなく、たいへん残念なこととして認めなければならぬ事実、かくも非人間的にうらひしめられた事実、人間の心があれば、農民の苦しさはわかるでしょう。こんなにも土地を思っている農民を！

私たちの生まれ育つた村々、また前みたいに静かで平和な村にか

一、軍事空港から絶対反対。

芝山町若山一八九七(二)

岩沢 幸江 (十五才)

私は空港を作るのは絶対反対です。なぜこんなに農民が大反対しているのに機動隊を動員してまで、私たちの土地を奪おうとするのですか。どうか私たちのことをよく考えて、正しい判断をしってください。

芝山町番田六四五

相川 幸治 (十五才)

空港絶対反対！

俺たちの静かな郷土を破壊する空港絶対反対、空港ができれば必ず公害が発生する。普通の公害ではない。

軍事空港絶対反対！

芝山町番田五八六

戸村 愛子 (十五才)

飛行機の騒音により学力が衰えてくる。

飛行機ができたことによって私たちの生活が乱される。

飛行機を作るのは国のためであつて、国民のためではない。

芝山町番田

山田 光子 (十五才)

毎日動き回っているブルドーザーの音だけでもひどいのに、飛行

えして！ 簡単な決着は望めようありません。政府の今後の出方は……。

今、改めて考え直してほぐしたいものです。

芝山町番田

小川 潔 (十五才)

農民にとって土地は命なのである。これを全く無視した空港建設事業を進めているあなたは、土地を奪うことしか知らない。

このように収用委員会の人たちに、空港問題を審理する権利は全くない。

騒音、排油、大気汚染による公害の中で、どうして人間が生活しなければならぬのか。この静かな、おだやかな土地に政府の強制力によって汚染をうたれることは、絶対に許せない。

現在の日本国の政治が、農民を弾圧するという暴力行為であることは、許せないことである。

空港建設は、絶対反対である！

芝山町若山一七五

岩沢 和己 (十五才)

空港絶対反対。

芝山町若山一七三

麻生 弘行 (十五才)

一、分期申請 裁決は違法である。

機動隊の騒音となつたらどうでしょう。先生の話を聴くもおろか、授業もできないと思つてしまいます。

なにも税金のむだ使いをしてまで、空港を建てる必要はないと思つています。

芝山町番田二二八

山室 俊子 (十五才)

大型ジェット機の発着による騒音、排油、排気ガスなど航空公害を週小に評価し、何対策もたてずに、建設を進行することは、周辺住民の生活を根本的に破壊することになる。

芝山町番田二三五

藤崎 広 (十五才)

空港絶対、農地を断固として守る。

芝山町番田四六三

尾野 清之 (十五才)

今の日本は平和です。

ここにつくろうとする空港は、家の人から戦争のための空港だといひます。また、はく所の何もなくなつてしまひます。

はくも本道にそつたと思ひます。戦争がおこれば、はくも戦争につれていひます。

こんな空港を作るとは絶対反対です。

芝山町妻田七五八

並木利江(十五才)

私の父も母も農業をして私を育ててくれました。ここに空港問題が出てくると私達は平和にくらして来ました。ここに空港問題が政府は、この平和な空港に、機動隊まで使った空港を作ろうとしている。私は農民の生活を破壊する空港に絶対反対です。

成田市神峰四一

藤崎紀子(十五才)

現地住民を無視した空港は絶対反対である。

成田市東峰一〇九

石井伸二(十五才)

現地住民の生活を破壊する空港に絶対反対。
成田市天神峰四二
石橋高雄(十五才)

○政府・公団は何の抵抗もなしに農民に機動隊を使い、暴力で空港を作ろうとしている。
○三里塚・芝山農民の生活を破壊し、戦争につながる軍事空港の建設をゆるすことはできない。
○三里塚軍事空港は、現地住民の生活、教育環境を破壊するので、建設をゆるすことはできない。
私たちはかなる国家権力の弾圧があっても空港建設を阻止し、そして勝利するまで闘います。

芝山町妻田

小川栄代子(十五才)

空港ができたら私は農民はいったいすればいいのだろうか。公団はちがう土地に移させようとしているが、それを認めることはできない。この土地は被害にあわず気候にも恵まれている。この住み慣れた土地を離れることは絶対できない。
空港ができれば、政府は飛行機が、私たちはどうなるのだ。国民がどうであろうともいいのだろうか。
空港建設は絶対認めない。

芝山町妻田八七一

石井八重子(十五才)

私は三里塚空港を作るのは反対です。しかし、この村が荒廃するにたまたま、空港はやむを得ないと思ふ。このまゝ開けて、ない村に飛行機が飛ぶなんて、考えられないことです。空港ができるといふことはある面ではすばらしいことだと思いますが、また、その反面、農民が汗水たらして耕してきた土地を奪われるということは、農民にとって大きな損害をこうむることになります。
私たちにしても、このなれた土地を離れ、友だちと別れることのはげしき。私はこの悲しさにたえることはできません。
空港が悪いんじゃない。科学を促進させた人間が悪い。いや空港ばかりでなく、何もかも、ロケット月へ行時代になったのも人間が考えだしたものだ。
空港建設は、私たちの心を苦しめている犯人だ！ 私たち少年行動隊は最後まで団結して空港に反対します。

闘争日誌

一九七〇・五・四一七二九

- 五月四日 三〇〇〇名の機動隊が出動。四〇〇メートル内六カ所の第二次強制退去を防止し、少年行動隊第一隊に出発。
- 五月六日 防共共産隊、成田署員とともに大雨水閉結小屋に押し寄せ、暴力をふるう。
- 六月一日 公団、四〇〇メートル南端の「プロ」建設計画放棄、片断開通決定。
- 六月二日 岩山地区「プロ」に対し、新聞記者小堀氏、同盟、取用委員に対し、手続書第二回公開審理の延期を要求、県庁におしこめる。
- 六月八日 千葉県庁で取用委員第一回の公開審理開く。少年行動隊六七〇名の関係が参加し二時間会が大層に遅れる。終了まじわ、但馬委員長の横暴な進行でマイクがけられる。
- 六月二日 飯田朝、県取用委員解任。
- 六月二〇日 工事用ブルドーザー二百台、天狗の出現で破壊される。帝岡石油、公団に五億円補償要求。
- 六月二七日 戸村一作委員、三里塚軍事空港を紹介するため、闘いに生きる。を出版。
- 六月三〇日 公団、取用委員会に第三次取用議決申請。

芝山町妻田七五八

吉橋幸子(十五才)

三里塚軍事空港絶対反対
一、新聞、ラジオ、テレビなど、あらゆる報道について、私たちは学生は争んでいる。報道とは、事実を明確に、そして早く国民に伝えることが報道の役目だ。それがなぜ空港建設によって、ために国民に伝わっていないのか。もっと明確に国民に伝えるべきだ。

一、機動隊あるいは自衛隊などは、国民を守るべきものだ。それが、なぜ私たち農民に暴力をふるうのか。これでは国を守るのではなく、私をおどす暴力団としかいえない。
一、私たち国民は、自由、平等という権利がある。住民の意志も聞かずに、たまたま暴力で土地を取り上げるのは、国民の自由、または住む権利を奪うものである。
憲法に違反している。



あゝあゝ、血と汗のたかひ

三里塚、芝山の農民は毎日生活することが権力との闘争であり、生きることがたかひである。三里塚、芝山の土地はあくまで、三里塚、芝山の農民のものだ。
自らが耕しつづけてきた土地を、権力によって奪われた運命にひきまき、農民としての誇りと良心を、物を乞い、けもののような権力の餌食にならぬことを、キパリ拒否し、三里塚、芝山の農民は「空港建設力阻止」闘争を今日までつみかさしてきた。そのために、三里塚、芝山の農民の血は権力の手によっていくたびとなく流された。

三里塚、芝山の農民の血と汗の闘争は「深刻化」、充実し発展を遂げた。
少年行動隊も大々とも現地におもひで、公団や機動隊と闘い、その闘争の中から、「学習は自分たちの手で育てよう」と、各団結小屋の部会所で自発的に学習会を開き、青年行動隊は「土地を武器に」、三里塚要塞を敷地のまん中に建設した。

反対闘争に結果を個々の農民は連帯闘争に力を入れた共同闘争を実施し、「農民の生産したものを労働者の手へ」のスローガンのもとに、生産組合の組織が強化され野党の集荷場が東峰部落に建設された。
また、空港建設ともなう関連事業も、各地で農民の抵抗があり、資材輸送道路や付帯道路はこぼれとなり、汚水、排水路は先が、ふんばりという状態である。

この三里塚、芝山の農民の闘争のまえに、土地取用法にもとづく

- 七月五日 青年行動隊、木ノ根地区地下要塞建設集会。
- 七月〇日 横堀地区でガードマンのパトロール阻止闘争。
- 七月八日 田地区への不法侵入を糾弾し、自己批判させる。
- 七月九日 小川プロダクション、「日本解放戦線」三里塚の冬、完結号公開。同盟、〇名参加。
- 七月九日 北富士入り込み三三三集結会、同盟員バス一台も参加。
- 七月三日 各団結小屋、公民館などで、少年行動隊夏期学校始まる。
- 七月二七日 古込、木ノ根地区で条件付き買収済み反対同盟管理耕作地をブルドーザーを押し、踏み荒らす。
- 七月二七日 ユンボ(二破壊)、公団、作業現場に連する電話線(二回線)三カ所を切断。
- 七月二九日 一時、同盟、ドラムカン、サイレンを台内に一五〇名が木ノ根地区に集結、工事の中止を要求し、私服や作業員とはげしくもみあい、撃退。同盟、土地取用法提案の三者会議(同盟、取用委員、公団)を拒否。

用地取得の期限は、あと四カ月後(十二月十六日)までとおいつめることができた。

友野工業関係は六月の根拠で、「来春に(四六年四月)開港することは出来ない」とい、今井文文(公団総務)は、七月の記者会見で、「反対派の土地は取用できない。用地取得のための手段として、建設大臣が直接決断をすることである特定公共事業の認定の申請を準備している」と、反対同盟の団結の強さを自ら公言した。

しかし、権力は、自らが発動した土地取用法による土地取得期限の切れる十月中旬までに決裁の申請が取用委員会に提出されるよう、九月、十月の二回にわたって第二期工事間の反対派の農民の土地、家庭に強制立入の腹をかためてきている。

三里塚の暑い夏といわれた四月三月四月七月まで四ヶ月間、延九千人の機動隊を相手に連日光臨をくりひらけことがあったが今度は天神峠を中心とする二五〇メートル附近、木ノ根、横堀を中心とする三五〇メートル附近、激闘が展開されることである。

三里塚、芝山の農民の血は機動隊となく、自らが耕しつづけてきた大地に流れることである。三里塚の農民はそれを恐れない。この血と汗を流すことによるのみ敵をうらたすことが、自らを解放する道であることを、闘争をうけて理解してきたのである。

ただ、絶望ではなく、希望であり、生きる者の躍動である。三里塚、芝山の農民は、さらに決意をかためて権力と対峙してゆく……

昭和四十五年八月 加瀬 勉

